

着生植物についての思い出

奥原 弘人

Okuhara, Hiroto : Notes on epiphytic plants

屋久島では少し傾いた樹幹上に5mくらいの高さまで大小多数のオオタニワタリが着生しているのを見た。これは気候が温暖なうえに月35日雨が降ると言っている島でのことである。それとは環境の異なる我が信州でも違う種類の植物ならば、このような現象を見ることはそれほど珍しいことではない。

着生植物は樹上や岩上に着くので、植物調査にあたっては、樹木があればその幹から枝まで、岩があればその隅々まで目を注ぐ必要がある。着生植物にはシダ植物やラン科に属するものが多く、比較的小さいので注意したい。

我が国で初めてウロコノキシノブが見つかったのは大麻村で1930年のことであった。道端のようやく手の届く高さの岩壁に着いていた。数人一緒であったが、初心者の私の手元にも3枚の標本が残っていたので全部ではかなり多数あったものと考えられる。葉の幅が広くホテイシダのようであったから、指導者の小泉秀雄氏が地名によってカシオホテイシダとしたが、それから遥か後の1959年に中村武久氏が遠山谷で採り、シダ植物の研究家の間で研究して中国に分布しているものと同種とわかりウロコノキシノブと命名されたことは知られている。

下伊那南部の調査の際、ある民家の庭先に植えてあった植物について、先輩がこれは岩に生えているセッコクというものだが何所にあったかと尋ねると、その家の主人がこれは木に生えていたからモッコクだとの答えであった。それから注意して見て歩いていたが、自然のものを見ることはできなかった。

その後カヤに着生しているカヤランとベニカヤラン（マツラン）を先輩が見せてくれた。比較的暖かな下伊那だからこそ、このような植物が見られるのだらうと考えていたが、それから数年後には木曾の北部で、雪の重みで

落ちたモミの枯枝にマツランが群がり着いているのが見つかり、こんな寒い所にもあるのかと驚いたことはすでに別にも述べてある。

木曾の南部で初めて見た着生ランはヨウラ克蘭で、丘の上に立っているカヤノキの枝に着いていた。丘の下から見上げると何か赤犬の尻尾のようなものに見えた。頭上10m以上も離れていたから形はわからなかった。よじ登って見ると小さな花を房状に着けた草が群がっていた。図鑑で種名は世話なくわかった。

それから注意すると木曾の南部には着生ランが多いことがわかった。1本のカヤノキに3種を着けたものもあり、太いかヤノキの樹幹一面に群生しているムギランもあった。カヤノキに最も多く着いていたが、モミやウメにも多く、その他多くの樹種に着いていた。木曾にはカヤノキの多いことも好条件であろう。

セッコクは見上げると高い岩壁に着いているのが花期とわかった。幹周8mというスギの太い枝に大きな集団となって着いているのも多かった。高いので採れなかったが、台風で落ちたのを拾って植えている家があった。長さ25cm内外のものが人頭大の集団となっていた。隣県中津川市にはカヤノキの比較的低い所についたのもあった。

マメズタランもカヤノキに着いたのを見たのが最初であった。次にはモミの太い枝に着いたのが見つかった。高かったのも、その時はよく似ていると思ったが、台風のあと、行ってみると枯れて腐りかけていたので落ちていた。直径15cmくらいで長さ2mくらいの枝をバスの中へかつぎこんで持ち帰った。

イワチドリは木曾川の岩上、増水すれば水につかるような所にあった。ダムのできる前は多かったと、鉢に植えている老人もあった。

最も珍種とされたのはムギランであった。

隣県坂下町でカヤノキに群がっているのを見つけた。持ち主の許しを得て高所まで登り、存分に見ることができた。国立科学博物館へ送ったところ全国第三番目の産地であるとのことであった。折から野生ランの図鑑を計画中の前川先生の求めに応じて採ってあげたこと、その後県指定の天然記念物となったことは別に述べた通りである。

これらの調査をまとめ「木曾谷の着生蘭」として「植物研究雑誌」に載せていただいたが、その後次の2種も見ることができて、木曾谷には11種の着生ランのあることを知った。

クモランは木登りの名人である知人がアラカシの高枝に着いているのを、目の前で探ってきてくれた。よくもこんな小さな物を見つけたものだと思心した。葉がなくて平らな緑の根を木肌に密着させて葉の代用をさせる珍しいランである。

ヒナチドリは国有林で働く人の庭に植えてあった。付近の山で伐採した樹木に着いていたとか。花はよく咲いていたが、植えたばかりでいかにも不自然であったので、来年は写真にしようとして翌年寄ってみると、だめになったとのことで姿を見ることもできなかった。

ウチョウランも着生ランとすれば、これは下伊那の天竜川縁でも見たが、中信地方で海拔1800mほどの岩隙でも見られた。

木曾の南部には着生シダも多く、その種類は35種ほどが見られた。その中には地生種とともに暖帯のものも含まれている。この地方は比較的温暖多雨であるからであろう。

その中でナカミシランは最初みつけたのは大岩の上に大きく群がっていた。棒をのばして少しばかり採った。次に見た所でも岩壁に群がっていた。その付近にはクラガリシダも群がっていたが、後年この谷の中部でも2ヶ所で高い樹上に群がっているのを見た。また、上伊那でも高い石燈籠の屋根に少し着いているのを見たが、発見地の岐阜県くわがら谷では2回とも見ることはできなかった。

シシランも暖帯のもので、木曾にはわずかであったが、三重県南部はシダ類の宝庫であ

るだけに大きな集団となって他種とともに旺盛であった。

スギランは最初木曾の中部でクリの叉に着いて群がっているのを見たが、近年南部では岩石の上に点々と小さなものが見られた。

オクタマシダは南部の国道端で岩に着いているのを見たが、県下ではここだけらしい。

ミツデウラボシは下伊那では標準形のものが見られたが、他では各地に多いが、その形は楕円型で小さい。これは品種として分けてもよいと考え、マルバノミツデウラボシの名を考えていたが、最近杉本検索誌にチャボミツデウラボシの名がつけられていることを知った。この形のものは北アルプスの谷間に多かったが、志賀高原の谷間に少し下がった所でも見られ、寒気に強いことを知った。

木曾が発見地とされているオシャグジデンドは珍しいものではなく、戸隠高原でも木の叉に集まっているのを見たが、最近みられなくなった。

イワオモダカは中信地方の谷間でも見られ、コガネシダも筑北の岩壁でみたが、よい形ではなかった。

サジランは木曾南部の深山で多く見たが、北部では国道に近い岩壁でも見られた。ヒメサジランは南部と中部の深山で倒木上に多く着いているのを見た。

オオクボシダは木曾南部の岩壁で何回か見たが、中部では海拔1500m辺の高地で樹木に多く着いているのを見た。近年北アルプス山中の岩壁でも見たが、貧弱であったから残しておいた。

キレハオオクボシダは木曾の中部でブナの樹幹についているのを採った。うす暗い林内でコケに混じっているのを採って国立科学博物館のおしば展出品したところ、全国第三の産地であり、人々の注目の的となったとのことであった。翌年営林署に勤める知人も採ったが、これは1mくらいの尖った岩石についていた。その頃の写真はカラーではなかったが、静岡大学の志村先生の求めによって著書に使われた。

クモノスシダの上部が多くに分裂している

のを諏訪で採り、ピロードシダの二裂しているのを木曾の中部でみつけたことは別に述べてある。

着生シダは高地にあるものもあった。南アルプス豊口山はトヨグチウラボシの発見地であるが、この大きな岩壁にはヤツガタケシノブも着いていた。これは八ヶ岳で発見されたことから両種は高地性であることがわかる。

ミヤマウラボシも同様に各地で時々見られた。

以上いろいろの着性植物を見て楽しんできたが、キレハオオクボシダのように極めて珍稀なものが、この手であるいは絶滅したのではないかと思うと胸が痛む。この小文が若い研究者のために多少の参考になればと思ってこれを草した。

アザミの雑種についての補記

奥原 弘人

先に上高地その他でアズマヤマアザミとノリクラアザミとの雑種と認められるものを見てカミコウチアザミと呼ぶことにしたことを述べ、木曾川上流の味噌川谷でも両種の雑種と思われるものを見たことも別の紙面で述べてあるが、味噌川谷のものは写真のように長枝を分けず頭花は短枝によって2~3個ずつ集まって着き、頭花は遥かに小さく総苞片の開出部は極めて短く、全体としてアズマヤマ

アザミに近い形である。これを上記の名で呼ぶことは適当でないと考え、地名により和名をミソガワアザミとしたい。

なお、古い野帳を調べていたところ、明科町の山中でアジアザミとトネアザミとの雑種と見られるものを見たことが記されている。しかしその写真は見当たらず標本についての記憶もないので、再び現地を調べたいが、その体力もないことが残念である。



写真1. ミソガワアザミ